

327

868

木
林
田
悟
由
禪
師
小
傳



始



森田悟由禪師小傳

327-868



大正五年八月 永平社仙家題



大正
5. 8. 23
内交

327-868



大正五年八月、永平社仙家題



大正
5. 8. 23
内交

眼

通

又

心





壽者出曾信法已新之在轉
入街城程依宿債解温在
今案八旬果漸成

大正三年信成
永平二十一年由

六十年年未漸飯僧家衣裳更
得人恒逢坊作戲浮去事
各物淨地批社仲

大正三年信成
永平二十一年由

序

一代の巨匠稀世の高僧たる、勅特賜性海慈船禪師は、昨年二月九日法壽八十二歳を以て涅槃の雲に藏れさせ給ひぬ、余は禪師に参侍すること二十五星霜、情父子の如く誼師資に似たり、是を以て追慕の念止む能はず、哀悼の涙禁ずるに由なし、禪師の郷黨なる尾州知多郡小鈴谷村盛田久左衛門氏は温厚篤實の君子にして、禪師に於ける道交亦最も深し、今回同村教育會の主催を以て禪師の生誕地なる大字大谷玉泉寺に於て追悼法會を營むに當り、同村第一尋常高等小學校長大野俊氏に囑して特に禪師の小傳を著はし、之を印刷に付して有縁の人に頒たんとす。余

之を閱覽するに言簡にして要を得、發心修行菩提涅槃の迹躍如こして紙上に溢れ、恍こして親く溫容に接するが如し、寔に禪師の高風を紀念すべき無比の法供養と謂つべし、禪師は智の人、に非ずして德の人なり、言の人、に非ずして行の人なり、心に不平を存せず、面に忿恨の色を形はさず、行に表裡なく、情に偏執なく、一生法喜を食こなし、禪悦を養ひこし、終身道を修め、化道を以て自ら樂む、而して能く世界の大勢を觀破し、人生の機微を洞鑿して、曾て誤らず、禪師は實に自然にして正智と實語とを領有し、給へるなり、常に衆に示して曰く、深く無常を觀じて、今日の事を忽がせにすること勿れ、和合の德を修めよ、和合は齊

家治國の大本なり、唯だ能く道を守れ、衆德皆此の中に在り、善法欲を起すべし、惡念邪欲は自づから滅盡すべし、一舉一動を慎むべし、天地の大道豈脚跟下を離れんや、己我を忘れよ、忘れ了る時常樂の我現前せん、道と終始せよ、佛祖と同生同死せよ、此等の微言盡く其の慈腸より出づ、禪師會心の弟子杉浦鏡華居士曰く、予始め禪師に參ず、淡々こして水の如し、再び之に謁す、醇乎こして甘露の如し、三び之を拜す、靄然こして佛陀の慈懷に投ずるが如し、爾來禪師を拜すること幾千萬回、一回毎に彌々高く彌々尊さきを覺ゆ、唯だ感涙に咽ぶのみと、余亦居士と感を同ふす、余等生れて此の高徳に遇ふ何の幸か、之に過ぎん、庶幾

くば此の小傳を見る者其の遺徳を仰ぎ其の遺訓を体し、
以て自ら徳の人行の人たらんことを期すべし若し能く
是の如くならば喜ぶらくは禪師の法身常に在して而も
滅し給はざるなり是を序と爲す。

大正五年八月

新井石禪敬識

森田悟由禪師小傳

天保五年正月元日尾張國知多郡大谷村(現今小鈴谷村)の一農家に
呱呱の聲を揚げたる一男兒は、即ち他日佛教界の泰山北斗として、
衆人渴仰の中心たりし一大偉人、前曹洞宗大本山永平寺貫首勅特
賜性海慈船禪師其の人なり、禪師は諱を恒由といひ後に悟由と改
む、大休と號し別に六湛道人とも稱す、父は森田常吉母は市田いぬ
禪師は其の第二子として生る、梅檀は二葉より香ばしく頻迦の鳥
は卵より諸鳥にすぐるごかや、母の懷に抱かれ居る頃より既に常
童と異なる所多かりしと言ふ、幼より葷肉を好まず遊嬉亦凡なら
ず最も佛前に近事するを喜び常に「唵摩呵」々々々と言ひき、稍や長

するに及び父母に向ひて佛弟子たらんことを請ふて止まざりければ、七歳の春遂に其の懇望にまかせ、名古屋大光院泰門和尚の徒弟となしぬ。翌天保十二年三月十二日出家得度し始めて素志を遂ぐることを得たり、爾來師僧の左右に隨侍して晝夜を分たず菩提の淨業を勵みたりしが、弘化四年の夏泰門和尚は紀州よりの歸途、伊勢山田町にて急病を發し療養其の甲斐なく遂に遷化せられしかば、禪師の悲嘆やる方なく涙の中に葬儀を畢りしが、禪師求道の志氣は一層猛烈となり、朝には食を托鉢に得て智を雪窓に磨き夕には跡を先賢に追ふて想を繩床に凝し、二六時中暫くも辨道を放過せざりきといふ、後伊勢飯高郡殿村なる大福寺に到りて、月定和尚の輪下に侍して修學する事二年、嘉永二年禪師十六歳の時、法兄なる

名古屋禪芳寺膺拳和尚の圓寂に遇ひて歸省し、爾來其後住なる法兄正道和尚を輔翼して錫を同寺に掛くる事約二年、嘉永四年の春諸國行脚の途に上り、四方を遍歴して多くの師友と交り研鑽琢磨の功を積む事約五星霜、安政元年始めて江戸に出て駒込吉祥寺の學舎旃檀寮に入りて内外の學を修め、傍ら碩儒東條一堂翁に就て漢籍を涉獵せりといふ、翌安政二年には近代稀なる江戸の大地震ありて、家屋の倒潰人畜の死傷無慮幾十萬なるを知らず、加ふるに卅餘個所より火災起りて八百八街は宛然阿鼻叫喚の地獄と化したりしが、幸ひにも禪師の身には微傷だにも受ざりしが、此時轉變無常なる人生の状態を目撃せられて感慨措く能はず、是に於てか翻然として學業の方向を一轉し、此一生に於て佛祖向上の關捩子を

透破せん事を期し、翌年の春斷然東都を辞し上州前橋の龍海院奕堂禪師の名聲遠近に高き事を聞き其徳風を敬慕して和尙の爐鞴に投ず、一見の下意氣相投じ感應道交父子の神契よりも切なるものあり、之より禪師は放身捨命益々修養の功を積み遂に大偉人たるの基を作り、蓋し奕堂禪師は當時の一大高僧にして、行持の嚴肅なる人に接するこの辛竦なる天下の人其の名を聞きしだに悚然として畏敬せざるは無し、禪師は斯かる孤危峻壁立萬仞の家風をも物ごもせず、朝參暮請暫時も懈怠なく、頭燃を救ふが如く修業せられたりき、安政四年の秋奕堂禪師は金澤天徳院の請に應じて轉住せられしかば、禪師も亦之に隨ひ行住坐臥巾瓶に近侍して暫くも坐右を離れず、恰かも影の形に従ふが如し、此間具に辛酸を嘗め

艱難を凌ぎ寸陰を惜みて力を參禪辨道に致されしが、慶應三年十月首めて金澤なる龍徳寺に住職せられぬ時に年三十四歳なりき、されども在寺の日にては殆んど稀れにして専ら奕堂禪師に參隨せられきこそ。

明治三年奕堂禪師大本山總持寺獨住第一世の貫首に就職せられし後も、尙ほ常恒に近侍して化門を補翼し且つ院事總監の任に當られたり、明治六年四月金澤玉龍寺の懇請によりて轉住せらるゝや、天下の龍象は翕然として其の法席に聚まる、尋で石川縣曹洞宗教導取締を命ぜられ、大に宗光を宣揚して地方教導の發展に盡瘁す、明治八年の春金澤天徳院住職活宗和尙退隱せんとするや、其の後住に懇請せらるゝこそ切なりしかば遂に之に應ぜり、是より禪師

の徳風は忽ち遠近に漲り四方の應請席煖かなるに違あらず、山間僻地を擇ばず雨雪寒暑を厭はず、南船北馬東笱西錫銳意宗風の弘通に其の全力を傾注せられき。

明治二十一年二月両大本山に於て宗門法式の改正と統一とを斷行するの企圖あるや、禪師は選ばれて該委員長に任ぜらる固辞するここ再三なりしも遂に許れざりしかば、餘儀なく上京して駐まるここ八個月、遂に宗門法式の改正を大成し洞上行持軌範を編輯せられたり、抑々明治維新の後江戸を東京と改めて帝都に奠めさせられ、歐米の文物潮の如くに来り上風下俗殆んど別世界の觀あるにも拘はらず、禪師は安政三年江戸を辞してより未だ曾て都會の塵に觸れず、漸く三十三年目を以て昔の江戸に上られたり、此一

事を見るも禪師が如何に名利の巷に近づかず超然として俗塵を脱離せられしかを知るべし。

明治二十四年大本山永平寺貫首琢宗禪師職を退くや、禪師は全國末派寺院の公選を以つて後董に推舉せられしも、器其の任に非ずとて謙讓固辞する事二週日、故福山黙童師末派の意志を代表して天徳院に趣き死を以て懇望せられしにより、禪師も其の熱誠に感じ九月十二日を以て本山六十四世の貫首たることを諾せられたり、時に年五十八歳なりき、其後間もなく宗内に意外の紛擾起りて前後四年に涉り、頗る混亂を極めたりしが、禪師は常に公平寛大の處置を取り、辛苦經營以て宗門百年の大計を講じ遂に之を鎮靜せられたり。

明治廿八年一月曹洞宗管長となり、爾後大本山總持寺貫首と隔年交代して管長の職に就く、同年五月二十七日には畏くも先帝陛下より特に性海慈船禪師の徽號を勅賜せらる、明治三十四年大本山總持寺貫首穆山禪師と協議して、一宗の大會議を開きて宗門の制度を改善し、大に教學の振暢を計りしかば之より宗門大に發展興隆の端緒に就くことを得たり、明治三十五年四月を期して開祖承陽大師の六百五十回大遠忌を營辨するの計劃を立て、先づ佛殿僧堂及び瑞雲閣等を改築し並びに諸堂に大修繕を加へ、又佛器法器什器等を新調せられしかば山門の莊嚴爲めに一新し、本山の美觀幾層の光彩を添ふるに至れり、尋いで豫定の如く大遠忌法會を嚴修すること三週日、闔國の道俗雲の如くに集り參拜するもの日に

萬を以て算するの大盛況を呈せり、事天聽に達し畏れ多くも先帝陛下には特別の思召を以て、高祖の眞前に承陽と大書せる勅額を下賜せられたり、宗門の光榮道俗の歡喜譬ふるに物なきなり。明治三十九年大本山總持寺貫首素童禪師と協力して、多年草案のまゝなりし宗憲宗法等の重要法規を改正し、大に一宗綱紀の伸張を圖り祖道開展の基礎を鞏固にす、四十二年九月二十日畏くも今上天皇陛下には皇太子殿下にておはしまし、御見學の爲め北陸地方に御行啓遊ばされ給ひし途次、特に鶴駕を本山に枉げさせられ御駐輦約四時間、禪師の御先導にて偏く諸堂を御巡覽遊ばされ斜ならず御満悦あらせ給へり。回顧すれば禪師の本山に住せられしこと茲に前後廿五年、歴代の

貫首中第二位の永住にして、其の間年々歳々各地の懇請に應じて錫を東西に飛ばし化を南北に布き、曾ては法を滿州の野に説き道を樺太の濱に傳へ、杖跡普く海内に印し徳化遠く外域に及ぶ、慈教愛語貴賤を等接し遠近の緇素法雨に浴せざるものなし、其の精力の旺盛なる其の法身の強健なる實に稀世の哲人と謂つべし。

大正三年の冬聊か心臓に故障ありて入澤醫學博士の診療を受け、其の勧めによりて豆州熱海に靜養せられしも浴養三週にして東京芝公園大本山永平寺出張所に歸錫し、大正四年一月には勤行應待尋常に異ならず、人に接すれば必ず諄々として慈訓を垂る、廿日に至り中耳炎を發し靜養中二月四日の夕急性胃腸加答兒を併發し、五日に至り病勢稍退きたるも如何せん衰弱甚だしかりしかば、禪師

は遷化の期の迫れるを感じれらしにや仰臥のまゝ、

耕雲種月 八十二年

脱落脱落 一箭離レ弦

と謂へる遺偈を口誦せられ、七日の夕刻より病革まりて昏睡の状態に陥り、九日午前九時過ぎには全く重態となり、午後零時四十分八十二歳を一期として溘然涅槃の雲に藏れ給へり。

禪師の入滅は只に禪門教界の一大不幸なるのみならず、實に之我が帝國の一大損耗として長へに哀悼痛惜の情に堪へざる所なり、この悲報一度傳はるや遠近の道俗來り弔するもの引きも切らず、遺骸を留むるここ五日、十三日東京芝愛宕下青松寺大法堂に於て密葬の嚴儀を營み、同夜桐ヶ谷にて荼毘に付し十六日遺骨を奉じて

東京を發し、十九日大本山永平寺に着し妙高臺に奉安せられぬ。禪師は人となり温順端正己れを持すること嚴肅、人を待つこと寛厚貴賤貧富を論せず温情を以て之に接し、教ふるに安心得道の法を以てす、喜怒色に現はさず飲食節を慎しみ一揆一擲人皆其の徳に化せざるものなし、是を以て故伊藤博文公を始め、一流の名士等多く其の徳風に歸崇したりき、又禪師は幼年の時より潜行密用の徳を積み給へり、嘗て東條一堂翁の門に學ぶや當時の塾生多くは是れ富豪武家の子弟のみなりしかば、洒掃の務めを知る者稀れなり、従つて龔内便所等の如き常に汚瀆を極め殆んど足を入るゝの餘地なき程のさまなりしかば、禪師は之を苦々しきこに思ひ學究の餘暇を利用して人知れず之を叮嚀に掃除せられぬ、其の事いつ

しか塾頭の知る所となりて大に之を感じ、特に塾生に告げて且つ賞し且つ誠め是れより以後は衆生をして輪番法に依り洒掃せしむるに至れりといふ、禪師の平生概ね是の如し。

大本山永平寺の如きも明治維新の際には、境内地の外は殆んど尺地寸土をも有せず、一時は迦藍の維持にすら苦しむ程の悲境に陥りし事もありしが、禪師の代に至りて漸次に不動産を増殖し、遂に田地二十餘町歩山林も亦百餘町歩の多きに達し、且つ數年以前より殖林の事業に着手して永遠維持の方法を確立せられたり、是れ皆禪師の盛徳の然らしむる所なり、禪師の偉大なる徳化は桃李言はずして下自から蹊を成し、冥々の間に我が帝國の精神界を饒益し給ひしこと幾許なるやを知らず、眞に明治佛敎界の明星と稱する

も決して過言に非ざるを信ず、故に徳風は四方に漲り化澤は中外に洽ねく、暗々裡に皇運を扶翼し國光を發揚するの鴻績蓋し鮮少なりとせず、嗚呼禪師の徳や大なるかな偉なるかな。

大正五年八月十六日印刷
大正五年八月二十日發行

編纂者 大野俊

名古屋市東區横代官町十番地

發行者 盛田久左工門

名古屋市中區南大津町二丁目壹番地

印刷者 海部幸之進

名古屋市中區南大津町二丁目壹番地

印刷所 中村寫眞館製版印刷部
電話一八六八番

327
868

終

